「ポスト文革」期の文学観念に関する一考察

——モダニズムに対する「誤読」とポストモダン——

宇野木 洋

【前言】

今回、「中国新時期文学中日学者対話会」における報告を基礎とした論文を掲載するにあたって、報告原稿の日本語ヴァージョン(即ち中国語に翻訳する前の原稿)に、一切、手を加えないことにした。時間の関係もあるのだが、何よりも「対話会」の臨場感を大事にしたい、と思ったからにほかならない。また、昨年末に南開大学中文系教授・張学正氏(私の二度に及ぶ南開大学留学において「導師」的役割を果たして下さった。この「対話会」にも参加する予定だったが「中国新文学学会年会」と重なったため、残念ながら参加できなくなったとのことだ)から、「対話会」における日本側の報告内容が、中国の研究者の間でも少し話題になったりもしている、といった手紙を受け取ったこともある。報告原稿に手を加えない方が、今後の継続的な討論に役立つようにも思われたからである。

なお、加藤三由紀さんが、「中国新時期文学中日学者対話会あれこれ」(『中国文芸研究会会報』第192号、97年10月)において、「日本人の発表に対しては、ほとんど意見が出なかった。ただ、宇野木洋氏の『関於“後文革”期文学観念的考察——対現代主義的“誤読”和後現代』に対しては、陳暁明氏から誤読の意義について疑義が出され、宇野木氏との間で論争が始まるかに見えたが、残念ながら、時間ぎれになってしまった」と書いて下さっている。だが、実際のところは、私の中国語運用能力の問題から、陳氏の質問内容が十分に聞き取れなかったために「論争」が成立しようがなかった、と言った方が正しい。才気あふれる陳氏は、ガダマーなどをも例に挙げながら、早口でたたみ込むように「モダニズム」や「ポストモダン」に関わる本質的な問題について、私の考えを質してきた(ように思う、としか言えないのが情けないのだが)のであり、到底、私の中国語運用能力では太刀打ちできず、逃げを打ったというのが実情である。——それにしても、加藤さんは、実に心やさしい人である。

以下、報告原稿を掲載しておく。ご批判いただければ幸いである。

☆　☆　☆　☆

1．「ポスト文革」期を考える視角——はじめに

今回の報告では、少しマクロ的な問題提起をさせてもらいたい。一人の日本人研究者として「ポスト文革」期をどう見るか、ということを、「ポスト文革」期のキーワードの一つである「現代／モダン」または「現代主義／モダニズム」、更には「後現代／ポストモダン」または「後現代主義／ポストモダニズム」という言葉を中心に考えてみたいと思う。

なお、最近、「新時期(文学)」は終わった、現在は「後新時期(文学)」だといった言い方も流行している。これは、周知のように、92年秋に開催された「走出80年代中国文学」学術討論会で提出され、93～94年にかけて「関於“後新時期文学”的討論」が展開されている。その意味では、「ポスト文革」という用語の概念規定が必要かもしれないが、ここでは省略させていただく。「文革後」とほぼイコールで理解していただいて、とりあえずは差し支えない。私としては、文革以前と文革後の間の落差の大きさに着目したいと考えるからであり、文革以前との対比こそが、現在も必要だと考えるからである。

2．「凝縮」による重層構造

まず、最近の中国をどう見るか、印象批評風に述べることから始めたい。

93年から94年にかけて、天津で在外研究を行なう機会があった。92年春の鄧小平のいわゆる「南巡講話」を受けて、「文芸の市場経済化」「文学の商品化」と呼ばれる現象が、加熱していく時期だったと言えよう。当時の見聞を一言でいえば、現在の中国は、日本における、「明治維新」と「戦後混乱」と「高度経済成長」と「バブル」が同時に出現している、というものであった。

中国は、例えば、自由民権運動(国会開設・普通選挙権要求運動)を始め、中央と地方の関係の整備、封建的風習の払拭などといった「明治」の課題に、現在も直面している側面があるのではないか、とも思うのである。また、敗戦直後の「戦後混乱」に見られたような、価値の転換期における一種の混乱と沸騰するエネルギーを想起させる状況も存在した。そして、年間成長率10％台が続く一方で、インフレや環境問題などが顕在化した「高度経済成長」に類似した状況が存在し、更に、土地の実質的「所有」が認められたことによる投機や、株をめぐる加熱現象も生じるといった「バブル」経済の様相も呈しているのである。そして、重要な点は、こうした状況が、全て同時に出現しているということにある。

上滑りした言い方になってしまうが、この「ポスト文革」の20年間に、明治以降の日本の営み、更には、いわゆる「西欧近代」(フランス革命以降)の200年の営みが、

「凝縮」されて展開されている、と見ることも可能なのではないだろうか。そして断わるまでもないが、実は、日本自身も、「西欧近代」200年の歩みを、明治維新以降の100年に「凝縮」してきていたのである。

中国のある文学理論家が、80年代末に、「西方における19世紀から20世紀にかけての文学の変革過程が、この文革後の10年間に凝縮され、改めて展開・深化しているかのようだ」(劉再復「近十年的中国文学精神和文学道路」、『人民文学』88年２期)と述べ、また別の文学者が「この間の進歩は速いというべきである。しかし他方で、中国は極めて困難な仕事を完成させなければならない。即ち、西方における、ルネッサンス時代の15世紀から20世紀に至る変革過程と、20世紀の60年代から80年代に生じた変革過程が、中国では同時発生しているからだ。近代文化の啓蒙思想、最も重要な基礎的な民主主義・自由・人権などの思想が、中国で今ようやく普及し始めると同時に、60年代以降の新しい思想も普及し始めたのである」(劉賓雁「知識分子与中国社会』、香港『百姓』88年5期)と記しているのを読んだことがあるが、まさに同感である。レベルは異なるにせよ、私と同質の問題意識が見出せるのではないか。

しかも、更に10年を経過した現在は、高度情報化社会でありグローバリゼーションの時代である。各々の現象が、重層化して存在・出現するしかないのである。だが、それ故に、西方そして日本において出現した様々な問題状況が、デフォルメされて登場しているようにも思われる。

例えば、90年代前半からの「文学の商品化」現象の蔓延によって生み出された、いわゆる「純文学の危機」「人文精神の喪失」といった事態が生じているのは事実である。だが、一方で、こうした最近の傾向は、様相は異なりながらも、日本社会にも以前より存在していた風潮であるのも間違いないところだ。ある意味で、中国社会(一部ではあるが)の、善し悪しは別にして、「成熟化」過程の顕現なのかもしれない。例えば、「純文学の危機」は、中国におけるカウンターカルチャーの誕生とその市民権の確立と裏表の関係にもなるのだ。もちろん、「純文学」「人文精神」をめぐる議論の意義を否定しているのでは全くないし、カウンターカルチャーを全面的に肯定しているわけでも毛頭ない。

誤解を恐れずに言えば、我々日本人研究者も、「近代」以降の日本が生み出してきた社会・文化における様々な矛盾や問題群に対して対峙する姿勢と、ある意味で同じ次元に立って中国の問題を考えるという視点が、現在、特に必要になっているのではないだろうか。従来、中国は特殊で日本とは全く別ものだと考える傾向が強かったように思うが、そうではなく、共通の課題を共通に議論することが可能になっているのである。今回の「日中学者対話会」もまさにそうした場なのだろうと思う。

3．「モダニズム」に対する「誤読」

ところで、先ほど、「西欧近代」「『近代』以降の日本」といった言い方をしたが、日本語としての用法である点に、注意を喚起しておきたい。日本語の場合、「モダン」の訳語として「近代」「現代」の二つが用いられており、特に、西欧における国民国家・市民社会の成立によって確立した文化・精神態度の問題を扱う際には、「近代」という言葉がキーワードとして用いられてきた、という経緯が存在する。その意味で、中国語における「近代」「現代」という概念とズレがある点を、まず確認しておく必要がある（こうした問題については、伊藤虎丸「亜州的『近代』与『現代』——関於中国近現代文学史的分期問題」、『二十一世紀』総第14期、92年12月、などを参照）。

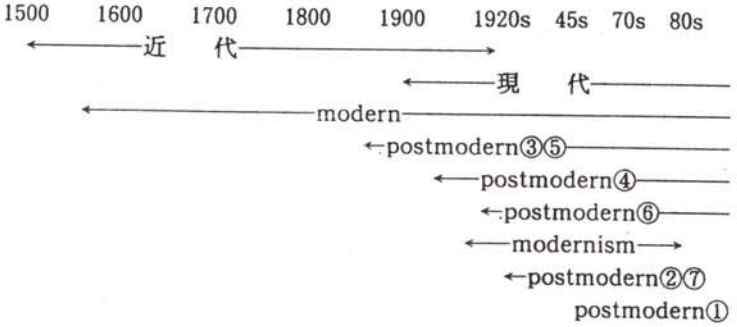
以上を前提に、西欧の思想史的文脈に即して、「近代」（日本語）をめぐる問題群を考えることから始めたい。

西欧では、16世紀前後（ルネッサンスが一つの契機とされる）に「近代」の萌芽が生まれ、18世紀末（フランス革命などが契機）に「近代」が成立したと看做すのが一般的である。この「近代」を支える理念が、人間中心主義・理性主義・科学主義・合理主義・進歩主義などといったものであった。こうした「近代」の理念は、長期間にわたって（ある側面では現在に至るまで）支配的イデオロギーの地位を占めていたが、20世紀、特に戦間期（20～30年代）に至って、漠然とした形ながら「近代」批判の動向が生じた。そして、20世紀後半、直接には60年代の、いわゆる認識論レベルにおける「構造主義革命」以降に至って、「近代」の枠組の変容・転換をもたらす、ないしはそれを確認し明確に問題提起する状況が出現してきた、と整理できるのではないか。

そして、20世紀初頭以降の「近代」批判の言説を「モダン」の課題と呼び、20世紀60年代以降の状況を「ポストモダン」の課題と呼ぶというのが、最近の日本における一般的な認識と見て差し支えないだろう。即ち、文化現象・思想状況の概念装置という視点から見れば、「近代」批判（＝「モダン」）は、20世紀初頭から醸し出されてきたが、明確に文化現象として意識されるに至ったのは60年代以降であり、同時に「ポストモダン」という新たな問題状況が「発見」されたのである。

こうした諸点については、次頁【ポストモダンの見取り図】（大橋洋一『新文学入門』岩波書店、95年８月）も参照してほしい。

ポストモダン(Postmodern)の見取り図



①1980年代以後 英米の文学史：80年代に書かれた小説，詩，戯曲をポストモダン文学と総称．様式の前衛性を問題にする場合としない場合あり．

②モダン(modern)，モダニズム(modernism)の後(post)に来る様式．芸術史・美術史：前衛的(avant-garde)な様式をさらに超える様式．芸術，建築におけるモダニズム(前衛性)から，さらに一歩進むか後退したもの．従来の様式の流用・組合せ．回帰と否定．

■英米系(社会学，歴史学)"postmodern"の語の歴史．

③1870 John Watkins Chapman(イギリスの画家) 印象派絵画を指して．

④1917 Rudolf Pannwitz, *Die Krisis der europäischen Kultur.* 当時の社会文化を指して．

⑤1947 D. C. Somervell, Arnold Toynbee の *A Study of History* を要約した一巻本において現代の社会を指して．その語をトインビーも採用．Cf. Dark(675-1075), Middle(1075-1475), Modern(1475-1875), Postmodern(1875-).

⑥1940s-1950s アメリカの社会学のなかで新しい社会・文化状況を指して．Bernard Rosenberg, *Mass Culture*(1957), Peter Drucker, *The Landmarks of Tomorrow: A Report on the New Post-Modern World* (1957), C. Wright Mills, *The Sociological Imagination*(1959). 大衆社会・脱産業社会．

■フランス系(哲学，文学)1970年代から80年代の文化社会現象の名称

⑦現在の脱産業社会，ハイテク高度情報化社会の状況を指す用語として．1945年までフランスは基本的に農業国．戦後，産業化の波に洗われ，脱産業社会へ．構造主義，ポスト構造主義の影響．代表的思想家：フーコー，ドルーズ，ガタリ，ボードリヤール，リオタールなど．

ここで、眼を中国に転じてみたい。

いわゆる「西方現代派」という言葉は、主として20～30年代に顕在化した新たな文学運動・文芸思潮の総称として用いられており、具体的には、象徴主義・表現主義・未来主義・シュールリアリズム・意識の流れ・実存主義・ダダイズム等々を指しているようだ。とすれば、上述した「近代」批判の言説群(＝「モダン」の課題)と、ほぼ合致する。ただし、中国における「西方現代派」という名称は、極めて大雑把な概念である点にも留意しておく必要があるようにも思われる。例えば、構造主義や魔術的リアリズムなども「西方現代派」として括られることが多いが、時期的な視点から見れば

問題が残るし、また実存主義と構造主義とでは、人間の位置に関して全く異なる指向性を備えているのも明らかである(例えばサルトルとレヴィ＝ストロースとの論争を喚起したい)。「西方現代派」とは、西欧20年代以降の、マルクス主義以外の文学動向を、十把一絡げに概括しているような曖昧な側面が存在している点には注意しておかねばならない。

ところで、繰り返しになるが、こうした「西方現代派」とは、「近代」批判を提出した文学的営為である。即ち、「近代」への懐疑を思想的背景としており、非人間中心主義・非理性主義などに裏打ちされている「モダン」の課題を意識した文学的営為(＝「モダニズム」)である。だが、「ポスト文革」期の中国に移入された際には、一種の「誤読」が生じたのではないか、というのが私なりの観測である。

「誤読」の焦点は、そもそもは人間中心主義に対する批判的な言説が、「人性論」と一体のものとして合体されて移入された点にある。例えば、初期における「誤読」の典型例として、いわゆる「朦朧詩」擁護へ向けた画期的な長編詩論である徐敬亜「崛起的詩群――我国詩歌的現代傾向」(『当代文芸思潮』83年１期)を挙げることができる。徐敬亜は、まず「この年(80年)、強烈なモダニズム的な特色を帯びた新たな詩潮が、正式に中国詩壇に出現した」と述べて、「象徴手法」「跳躍性」「内的リズム」「重層空間構造」などといった「朦朧詩」に見られる文学上の特徴を、「モダニズム」と規定する。そして、「過去において、我々は、それ(「西方現代派」)は資本主義が没落の道を歩む際の精神的産物にすぎない、と一貫して強調してきた。……(このことが)我々の30年来の欧米芸術に対する全体的認識を、未だに100年以上も前のロマン主義時期の段階に停滞させているのだ」と述べて、従来からの「西方現代派」(＝「モダニズム」)に対する排斥の態度を批判するのである。だがその一方で、「詩とは人類の生命の強烈な放射であり、詩人の感情の拡張である」「『詩人は、まず人間である』――人間という、この森羅万象の文字は、大半の中年・青年詩人たちのテーマ・意図となった」と強調し、「理性精神」に基づいた「自我」の表現をスローガンに掲げるのである。

徐敬亜の主張には、そもそも非人間中心主義・非理性主義などを特徴としていた「モダニズム」を高く評価し復権を呼びかけながら、「人間」「自我」「理性精神」を重視する、という「矛盾」が存在しているのが看取できよう。表現形式は「モダニズム」、表現内容は「人間中心主義」と言ってもよい。そして、この種の主張は、徐敬亜一人のものではなかったことも断わるまでもない。

もちろん、こうした「誤読」が生じざるを得なかった、当時の思想的基盤を無視するつもりは毛頭ない。「ポスト文革」期に至るまで、「モダニズム」はブルジョア思想の産物として徹底的に批判されてきたことから、80年代前半は、まだ復権途上にあ

ったと見ることができるだろう。また、80年代初頭とは、「疎外」をめぐる議論に象徴的なように、文革で否定しつくされた「人性」の回復が思想的テーマになっていた時期でもあった。こうした背景から、「モダニズム」を「人性論」「人道主義」、即ち、人間中心主義・理性主義的に認識・把握する傾向が生じたことは理解できるし、その中国的「誤読」が、中国80年代の豊かな文学的成果を生み出したという側面も存在したと考える。

そもそも、異文化を受容する際には、本来的・必然的に「誤読」が生じる側面があり、「誤読」による変容が、新たな文化を生み出すとも言えるのである。従って、私としても、「モダニズム」に対しては、「誤読」による中国的発展という側面を確認しておきたいとは思う。

だが、同時に、「モダニズム」と「ポストモダン」との関係を考察していく際には、こうした「誤読」を100％肯定するだけでは、問題が見えにくくなっていくようにも思われるのだ。また、日本の研究状況と共通の土俵に立って議論を進める場合に、混乱が生じる可能性も存在するようにも思われる。

以下、「ポストモダン」または「ポストモダニズム」をめぐる問題状況について考えてみたい。

4．中国的な「ポストモダン」

前述した天津における在外研究期間中(90年代前半)の「熱門話題」は、「ポストモダン」「ポストモダニズム」だった。北京大学出版社から、「中国当代文学教学研究参考資料」として「中国後現代文学叢書」が刊行された(94年２～４月)のもこの時期だった。

だが、「ポストモダン」というターム自体は、実は80年代前期から、即ち「モダニズム」が移入されるのとほぼ同時に、中国に移入されていたのも事実である。しかし、当初は「モダニズム」の亜流と看做されていたようだ。「ポストモダニズム」とは「後期モダニズム」の意味だと誤解された側面すら存在したらしい。だからこそ、「西方現代派」の中に、構造主義や魔術的リアリズムといった、本来は「ポストモダン」性を備えたものまでもが含まれて理解されたのであろう。ここにも、多様な欧米文化・思想を一気に移入するしかなかったことから生じた「誤読」が存在していたのである。当代中国における「ポストモダニズム」は、「モダニズム」と合体して、「ポストモダニズム変体」(王寧「中国当代文学中的後現代主義変体」、『天津社会科学』94年１期)と呼ぶべき文学的存在になっている、との指摘もなされているが、その出発点には、やはりこの「誤読」があったと見てよいだろう。

「ポストモダン」いう概念を理論的に定着させた最初の契機は、アメリカのネオ・マ

ルクス主義の文学理論家であるフレデリック・ジェイムソンの北京大学における講学(85年９月～12月、比較文学研究所。テーマは「当代西方文化理論」)だったのではないか、というのが私の観察である。当時のジェイムソンの講学の内容は、唐小兵「後現代主義：商品化和文化拡張」(『読書』86年３期)、『後現代主義与文化理論――弗・杰姆遜教授講演録』(唐小兵訳、陝西師範大学出版社、86年８月)などで見ることができる。だが、ジェイムソンの「ポストモダン」概念には、彼独特の用法が存在していることも事実である。

もちろん、そもそも「ポストモダン」という概念自身、極めて曖昧なものであり、論者によって、意味する内容がかなり異なっている側面さえ存在する。ジェイムソンの場合、一言で言えば、ポスト工業化社会、商品化・消費社会、高度情報化社会などの次元の問題(時代概念や社会現象)にシフトして「ポストモダン」を把握する傾向が強い点は、確認しておく必要があるように思われる。こうした傾向が、中国における「ポストモダン」受容・理解に如何なる影響を及ぼしているか、今後とも注目しておきたいが、ここでは、一点のみ問題提起をしておく。一般に、王朔を「ポストモダン」的作家の一人に数えあげることが多いようだが、私としては、商品化社会・消費社会に生きる青年の心理・意識を描けば「ポストモダン」を描いたと言えるのか、との思いを抱いている。王朔を「ポストモダン」と結びつけるにあたって、ジェイムソン的な「ポストモダン」概念が背景に存在したのではないだろうか。

とはいえ、こうしたジェイムソンの受容などを通して、「モダニズム」と「ポストモダン」の違いが意識され出し、更に、その過程を通じて、「モダニズム」に対する「誤読」の質と、それ故に中国的な発展がもたらされてきたことが、認識されてきたように思われる。そして、80年代末から90年代初頭に至って、市場経済化の急激な進展と欧米文化の急速な浸透によって、都市を中心に、従来とは異なる文化・社会現象が広範に出現したこと、また、いわゆる「ポストモダン」性(意義・中心・美の「消解」、そして人間の主体性、即ち「大写的人」の「消解」など)を備えた小説群(「先鋒文学」などと呼ばれる余華・馬原・格非・蘇童など)が登場したこと、等々が基盤となって、ようやく「ポストモダン」や「ポストモダニズム」がキーワードとして定着してくるのである。

５．「モダン」から「ポストモダン」へ――おわりに

日本では、80年代前半に「ポストモダン」ブームが生じたが、最近では、「ポストモダン」という言葉さえ、見かけることが少なくなった。「ポストモダン」が、本来的に曖昧な概念であり、文化現象・思想状況を考える際の、一つの過渡的な思考装置にす

ぎなかったからかもしれない。

私としては、「ポストモダン」の「ポスト」は「後」のみならず「超」「脱」の意味を含むと考えるところから出発したい。日本語では「超近代」「脱近代」という訳語を与えることも存在する。「ポストモダン」は、単なる年代概念ではなく、「近代」(=「モダン」)を乗り越えようと試みる、思想の運動のようなものだと考えている。だとすれば、「ポストモダン」は「モダン」が自覚的に開始された当初から存在していたとも言えよう。「モダン」が自己充足や閉鎖状況に陥り「停滞」した際に、それを打破しようとする、「モダン」が本来的に備えている、思想の自己革新運動こそが「ポストモダン」なのである。当代日本の中堅的な文学理論家・哲学者たちが、「ポストモダン」と「モダン」は一人二役である(柄谷行人)、「ポストモダン」は「モダン」のもう一つの顔である(鷲田小彌太)、等々と述べていることの意味も、こうした点にあるのではないだろうか。

このような「ポストモダン」の捉え方は、日本的「誤読」なのかもしれない。だが、そこには、変容による日本的展開が存在するのも間違いないだろう。では、こうした視角から、中国文学における「モダニズム」そして「ポストモダン」をめぐる問題状況を見つめ直した場合、何が浮かび上がってくるだろうか。今後とも私なりの思考を続けていきたいと思う。「誤読」の背景には、まさに「凝縮」による重層化が存在しており、程度の差はあれ、日本・中国ともに、それに直面しているのだから。

抽象的で大雑把な話になってしまったが、日中両国の研究者が、共通の基盤で議論すべき問題を、幾らかでも提起できていればうれしく思う。

【関連論文】(宇野木)

＊「徐敬亜『崛起的詩群』の周辺——現代詩の試みと“挫折”」(『外国文学研究』第66・67号、立命館大学、85年6・8月)

＊「異文化受容形態としての〈転向〉と〈回心〉——同時代中国における『西方』文学理論受容の一側面」(『国際化と異文化理解』法律文化社、90年1月)

＊「文学理論状況をめぐる『知』の枠組とその転換」(『現代文学理論を学ぶ人のために』世界思想社、94年10月)

＊「文革後20年の文学状況を振り返る——『凝縮』と『重層化』の視角から」(『季刊中国』第47号、季刊中国刊行委員会、96年12月)

【参考論文】

＊陳曉明『無辺的挑戦——中国先鋒文学的後現代性』(時代文芸出版社、93年5月)

＊程文超『意義的誘惑——中国文学批評話語的当代転型』(時代文芸出版社、93年6月)